

# 古英語『謎詩』の定型句について

藤原保明

## 0. まえがき

古英語の『謎詩』はなぞなぞをテーマにした94編の詩から成るが<sup>1</sup>、全体の約4分の1に相当する20編以上の詩では、末尾ないしはそれに近いところで‘Say what I am called.’という型の句によって、読者に謎解きを促している。これらの句を詳しく検討してみると、興味深い言語事実がいくつも浮び上ってくる。そこで、本稿では、これまで注目されることがなかったこの形式の句に焦点を当て、この句が口誦定型理論の是非について検討を加える上で、また、古英詩の韻律構造を解明する上で、きわめて重要な鍵を握っていることを明らかにする。本稿ではこの句を「命令定型句」と呼ぶことにする。最初に、この句が定型を成しているという仮説の提案を行い、次いで、この仮説の検証を行う。さらに、この句が古英詩の韻律上、とりわけ「頭韻階級の原則」の下位規則の妥当性を主張する上で決定的な役割を果たしていることを明らかにする。

## 1. 口誦型理論と命令定型句

古英詩の場合、全く同一の表現が1つの詩の中で、あるいは異なるいくつもの詩の中で何度もくり返し用いられることが少なくない。たとえば、本稿で分析対象としている Saga hwæt ic hætte ‘Say what I am called.’ の場合、この句と一字一句違わない全く同一の表現が10回用いられている。問題は、この表現が定型を成しているかどうかにある。ここで言う定型とは、いわゆる口誦定型理論 (Oral Formulaic Theory) に基づいた表現のことで、アングロ・サクソン人がブリテン島に移住するはるか以前に出来上がり、当時の吟遊詩人たちが口誦で作詩する場合に活用していた半行の型のことである。当時の詩人は修行中に詩の骨格を成すこのような半行型をたくさん習い覚え、基本的には不変である詩の原型に若干の修正を加えて新たな表現を生み出し、詩を作っていたと考

<sup>1</sup> 校訂者によって詩の数は異なることがある。本稿では Muir (1994) の刊本からデータを得ている。

えられている<sup>2</sup>。

定型であるかどうかの判断基準は、まず第一に、当該の表現が他の語句を伴わずに半行を形成して、何度もくり返し用いられているかどうかである。第二に、意味上、統語上、あるいは韻律上の必要をまかなうために、原型に修正が加えられて異形がいくつも作り出されているかどうかである。第三に、1編の詩のみならず、他の詩においても原型や異形が用いられているかどうかである。

そこで、これら3つの基準について、順次検討してみたい。まず第一の基準について見てみると、Saga hwæt ic hātteはこの句だけで半行を形成して、類似の表現の中では最も多く、10例も用いられていることから、原型とみなせそうである。第二の基準の場合、(1a, b)ではicが文法上の呼応の必要からhīo 'she'やhit 'it'に変えられている、(1c)では、icが別の人称代名詞hīoに、hātteが別の動詞wære 'was'に変えられている、さらに、(1d)では、sagaが別の動詞frige 'ask'に置き換えられている。(1e)も同様の趣旨にそった言い換えとみなせる。これらの例を総合すると、「発話動詞(verb of saying)+hwæt+主語+動詞」という抽象的な型の存在を想定することができ、さらに、この原型とも言うべき型から他の命令句が作られていると推測できる。これらの2点から、Saga hwæt ic hātteは口誦定型句とみなされている他の定型と同様の特徴を示していることが分かる(近藤・藤原, 1993: 116-117)。

- (1) (a) Saga hwæt hīo hātte 'Say what she is called' (39.29b)<sup>3</sup>  
 (b) Sage hwæt hit hātte 'Say what it is called' (19.9b)  
 (c) Saga hwæt hīo wære 'Say what she was' (36.7b)  
 (d) Frige hwæt ic hātte 'Ask what I am called' (14.19b)<sup>4</sup>  
 (e) Ræd hwæt ic mæne 'Explain what I tell of' (61.9b)

ところが、3番目の基準の場合、『謎詩』以外の古英詩をすべて調べてみると、興味深いことに、seccan 'say', fricgan 'ask', rædan 'explain', reccan 'tell', nemnan 'name, call'などの発話動詞の命令形で導かれる句が単独で半行を構成する例は全く見当たらない。したがって、命令定型句は『謎詩』だけに見られ

<sup>2</sup> もっとも、この理論は意義なく受け入れられているわけではない(Mitchel 1995: §457; Lapidge 1999: 345)。

<sup>3</sup> これと全く同一の句はその他に1例(85.7b)ある。なお、本稿ではa, bはそれぞれ第1半行、第2半行を表すものとする。

<sup>4</sup> これと全く同一の句はその他に3例(16.10b, 26.26b, 27.15b)ある。

るきわめて特殊な句であることになり、これでは口誦定型句の3番目の基準に合致するとは言いがたい。

しかし、ここで考慮せねばならないことは、Say what I am called.という型の命令文の特殊性である。一般に、Bēowulf is mīn nama. 'My name is Beowulf.' (Beowulf 343b)のように、自分の名前は問われて答えるものである。『謎詩』では、語り手がある事物や現象について種々の記述を行い、1人称または3人称で語られている事物や現象の正体を読者に推理させる形式となっている。こういう特殊な形式であるからこそ、このような命令文を用いることが可能なのであり、それ以外の形式の詩においては、この種の命令文は一般に存在しえないと思われる。事実、この種の命令文は古英詩ではほとんど見当たらない。

したがって、このような特殊性を考慮すると、Saga hwæt ic hātte は定型句となっていると主張しても、妥当性を欠くものとはならないであろう。もっとも、この命令定型句が『謎詩』の詩人の好みまたはスタイルを反映している可能性を完全に否定することはできない。なぜなら、secgan の命令法・単数形<sup>5</sup>の saga は古英詩全体で29回用いられているが、このうちの過半数に相当する17例は『謎詩』で用いられていて、しかもこの17例の過半数である10例は Saga hwæt ic hātte という句を形成し、これに比べると、他の発話動詞の例は極端に少ないからである。ちなみに、fricgan の場合、この動詞の命令法・単数形の frige は古英詩で5回用いられているが、Maxims I(A)の Frige mec frōdum wordum. 'Ask me with wise words' (1a)を除く4例は、いずれも『謎詩』で用いられていて、saga に次いで例が多い。

命令定型句の特殊性は hātte にもある。古英語の数少ない中間動詞 (middle verb) の典型である hātan 'be called, name' の場合、1人称・単数・現在形の hātte は古英詩全体で27回用いられているが、このうちの大半、すなわち、20例は『謎詩』に見出されるものである。したがって、saga と hātte が共起する命令定型句がいかにか特殊なものであるかよく分かる。

## 2. 頭韻階級の原則と命令定型句

saga と hātte という定動詞が同一半行に共起する例が20以上存在するという事実は、古英詩の韻律、とりわけ(2)に示した「頭韻階級の原則」<sup>6</sup>の妥当性

<sup>5</sup> 古英語では命令法には単数形と複数形の区別がある。

<sup>6</sup> (2)の原則は、藤原(1990: 284-285)の趣旨は変えず、字句を若干修正して再録したものである。

を検証する上で、きわめて重要であると思われるので、この節ではこの原則と命令定型句の関係について検討したい。(藤原, 1990: 284-5)。

## (2) 頭韻階級の原則

(a) 古英語の語彙は頭韻上、次の4つの類に分けられる。

1類： 名詞、形容詞、派生副詞

2類： 本来語の副詞の一部

3類： 動詞  $\left\{ \begin{array}{l} 1類：非定形 \\ 2類：定形（ただし、be動詞と法助動詞は除く） \end{array} \right.$

4類： 機能語、本来語の副詞の一部、be動詞、法助動詞

(b) 類の異なる複数の語が同一半行中で共起する場合、頭韻に加わるのはより上位にある類の語である（1類→4類の順に下がる）。

(c) 同じ類に属する複数の語が同一半行で共起する場合、頭韻に加わるのはより左に位置する語である。

(d) 二重頭韻の場合、頭韻語の1つは(a)～(c)の原則に従わなくともよい。ただし、この語は1～3類に属する語に限られ、第1半行の最左端の位置にこなくてはならない。

上記の原則はすべての古英詩に適用でき、例外は少ないことから、確立したものと言ってよいが、第2半行では原則を逸脱する例が時おり見られる。これは、第2半行が第1半行の統語上および韻律上の制約を強く受けることから、原則を完全に守ることは不可能であることによるものと思われる。とりわけ、定動詞の場合、2つの定動詞が同一半行に共起する例がきわめて少ないことに加えて、原則を逸脱する例の方がやや多い。たとえば *Beowulf* の場合、該当例は第1半行では(3a, b, c)の3例のみであり、しかも第1半行であるにもかかわらず、頭韻に加わるのは右側の定形であり、(2c)の原則に違反している<sup>7</sup>。もっとも、第2半行の2例、すなわち、(3d, e)では、いずれも左側の定形が頭韻に加わり、原則が守られている。

(3) (a) mynte þæt hē gedædde ‘(he) intended that he would divide’ (731a)  
       +F                                  +F

(b) bæd þæt gē geworhton ‘(he) bade that you should achieve’ (3096a)  
       +F                                  +F

<sup>7</sup> 本稿では、頭韻に加わっている子音字は斜字体で表すこととする。

(c) cwædon þæt hē wære '(they) said that he had been' (3180a)

+F                    +F

(d) Sægde sē þe cūþe 'He who knows said' (90b)

+F                    +F

(e) sēc gif þū dyrre 'seek if you dare' (1379b)

+F                    +F

一方、*Andreas* の場合、定動詞が2つ同一半行に共起する例は、第1半行には全くなく、第2半行でも(4)にあげた2例にとどまる。もっとも、頭韻はいずれも左側に位置する語に実現していて、(2b)の原則は守られている。

(4) (a) Pū wāst ond const 'You know and are acquainted with' (1282b)

+F                    +F

(b) weald hū ðē sæle 'decide how may fall on you' (1355b)

+F                    +F

その他の主な古英詩においても、該当例はほとんど見当たらないことから、(2)の原則を設定する時点で、(2c)については、とりわけ2つの定動詞の間の優先順位に関わる原則については、他の類から「類推」して設定せざるを得なかった。ところが、『謎詩』の命令定型句を分析した結果、2つの定動詞が同一半行に共起する場合が23例あることが明らかとなったことから、これらの例は(2c)の原則の妥当性を検証する格好の材料となりうる。そこで、これら23例について、以下で検討してみたい。

まず、*saga* と *hätte* が共起する(5a)の13例の場合、いずれも第2半行に生じているが、頭韻するのはいずれも左側に位置する *saga* であることから、(2c)の原則は忠実に守られている。その他の10例の場合、2つの定動詞の組み合わせは *saga* — *hatte* とは異なるが、(5b~h)に見られるとおり、頭韻はいずれも左側に位置する定動詞に実現していて、やはり(2c)の原則に忠実である。このように、23の該当例はすべて(2c)の原則を守っていることから、(2c)の妥当性は証明されたとと言える。

(5) (a) Saga hwæt ic hätte 'Say what I am called' (3.72b)<sup>8</sup>

+F                    +F

<sup>8</sup> これと全く同一の句はその他に12例(8.8b, 10.11b, 12.13b, 23.16b, 62.9b, 66.10b, 73.29b, 79.11b, 82.14b, 19.9b, 39.29b, 85.7b)ある。

- (b) Saga hwæt hīo wære. 'Say what it was.' (36.7b)  
+F                    +F
- (c) Frige hwæt ic hātte. 'Ask what I am called.' (14.19b)<sup>9</sup>  
+F                    +F
- (d) Saga hwā mec þecce, 'Say who covers me,' (1.14b)  
+F                    +F
- (e) Ræde, sē þe wille, 'Explain, who will' (59.15b)  
+F                    +F
- (f) Ræd hwæt ic mæne. 'Explain what I tell of.' (61.9b)  
+F                    +F
- (g) Rēce, gif þū cunne, 'Tell, if you can,' (32.13b)  
+F                    +F
- (h) Secge sē þe cunne, 'Say who may know,' (67.15b)  
+F                    +F

(2c)の有効性が確認されたことから、(6)のような長行の頭韻例についても、明確な主張をすることができる。すなわち、第2半行は hātte の h ではなく、frige の f の頭韻の可能性が高く、第1半行は(2a)の原則に従うと、非定形動詞の gehabban のではなく、派生副詞 fæste の f が頭韻に加わっていることから、この長行の場合は h ではなく f の頭韻例であるという解釈が当を得ている。

(6) fæste gehabban. Frige hwæt ic hātte. 'hold fast. Ask what I am called.'  
(16.10)

## まとめ

本稿での分析により、Say what I am called. という形式の句は口誦定型に合致すること、さらに、この句は頭韻階級の原則にかなっていることが明らかとなった。

## 参考文献

- Fujiwara, Yasuaki. (藤原保明) 1990. 『古英詩韻律研究』 広島, 溪水社.  
Klaeber, Fr. (ed.) 1950. *Beowulf and The Fight at Finnsburg*. Boston: Heath.

<sup>9</sup> これと全く同一の句はその他に3例(16.10b, 26.26b, 27.15b)ある。

- Kondo, Kenji (近藤健二), Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) 1993. 『古英語の初歩』 東京, 英潮社.
- Lapidge, Michael, et. al. (eds.) 1999. *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England*. Oxford: Blackwell.
- Mitchel, Bruce. 1995. *An Introduction to Old English and Anglo-Saxon England*. Oxford: Blackwell.
- Muir, Bernard J. (ed.) 1994. *The Exeter Anthology of Old English Poetry*. 2vols. Exeter: University of Exeter Press.